

西屋城の合戦②

天正七年（一五七九）に宇喜多家と毛利家が決裂し、鏡野町域は両勢力が混在する激戦区になります。西屋城合戦前夜の周辺の状況はどのように動いていたのでしょうか。

この年、宇喜多家は、毛利家に属する祝山城（医王山城・岩尾山城・津山市吉見）を攻撃します。すでに備中国を支配下に置いていた毛利家は、山陰攻略を担当していた吉川元春（毛利元就の次男）を大将として美作西部から侵攻を図り、現在の真庭市域にある諸城を落とし、葛下城（山城）に軍勢を集めれば、祝山城への連絡路が確保され、宇喜多方へ

の牽制となるとの見通しを立て進軍します。さらに祝山城との連絡路を強化するため、家臣の森脇春方らを升形城（枅形 香々美）に派遣して城の普請を命じ、美作西部の足固めを着々と進めていきます。

一方、小田草城（馬場）を本拠地とする斎藤近実（玄蕃）は、かつては備中の三村家と深い関わりを持ち、毛利家に属していた時期もあったようですが、三村家滅亡後は宇喜多家に属し、祝山城攻めにも加わっており、天正八年（一五八〇）三月十六日付けで宇喜多家重臣の花房助兵衛から、祝山城山麓で討取った敵の首

を送り届けたことによる感謝状を受けています。

しかし、同年五月十日付けの吉川元春の書状の中で、小田草城が間もなく落城することが書かれ、別の書状では、五月十五日に家臣を小田草城へ在番（赴任）することを命じていますので、小田草城は間もなく毛利方により落城したようです。その後の近実の動向については、同年十月十五日付けで、吉川元春が升形城に在番する吉田源四郎と森脇春方に送った書状の中で「祝山城の出城である仙城（津山市加茂町栖井）で在番していた「斎藤」と塩屋元真の家臣が宇喜多方に寝返って退去した。仕方がないことだ。」と述べています。

この書状から、斎藤近実是小田草落城後、毛利家に服属し、今度は毛利方として祝山城の出城である仙城に在番を命じられていましたが、宇喜多方の調略により寝返り、城を去って宇喜多方に戻ったことが推測できます。これを裏付ける史料として、近年、森俊弘氏によって新たに紹介された十月十三日付けの宇喜多直家の書状の中で、「斎玄という者が高丸（場所不明）に在番し、毛利方の渡辺与七郎を討取ったことについて、すぐに連絡したいが、このたび宇喜

多方に味方してまだ日が浅いので特別な配慮も考えたい」とあります。「斎玄」が斎藤玄蕃すなわち近実をさすことは間違いなく、書状の日付から、これは近実が毛利家を寝返った直後の出来事と思われます。その背景はわかりませんが、一時的に毛利家に服属しながら本拠地奪回を目指し、再起の機会をうかがっていたのかもしれない。

翌天正九年一月、長くもちこたえた祝山城は、雪も深まり援軍や補給もかなわず、ついに放棄されることとなりました。城兵は退去し、城は宇喜多方の手に落ちたようです。祝山城の城将のうち、福田盛雅と小川元政が小田草城への在番を命じられていますので、小田草城はまだ毛利家の支配下にあったようですが、前月号で紹介した、宇喜多方が西屋城を奪い、苔口宗十郎を大将として置いたのがこの前後頃と思われるので、本拠地を失ったままの近実も、この後に小田草城に近い西屋城を守るようになったようです。

参考：『鏡野町史』『奥津町史』『美作国の山城』『鏡野郷土博物館講義録』『津山市史研究』創刊号

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話（0868）54-7733



祝山城跡（津山市指定文化財）



升形城跡（町指定文化財）



小田草城跡（町指定文化財）